

編纂事業の進捗状況

中川和明

はじめに

百五十年史編纂の進捗状況を報告するのは四回目となった。今回は、二〇一三年一月から二〇一四年一〇月末までである。昨年度まで、早稲田大学百五十年史編纂委員会は年一度の開催であったが、二〇一三年度から前期・後期にそれぞれ一回ずつ開催されることになった。それに伴って、編纂専門委員会の回数も多くなっている。以下、編纂専門委員会・編纂委員会を中心に説明していききたい。

一 二〇一三年度末の状況

(一) 編纂専門委員会(第三回)

二〇一三年一月一九日に、會津八一博物館二階津田記念室(二二・一〇〇〜二三・三〇〇)において、編纂専門委員会(第三回)が開催された。出席者は四名であった。先ず、協議事項は次の通りである。

1. 『早稲田大学百五十年史』編集・執筆体制の件

委員長より、編集・執筆体制案、「早稲田大学百五十年史編纂専門委員会運営要領」(案)、および二〇一四年度・二〇一五年度の活動目標について、それぞれ説明があり、協議した。さらに、委員長より、編纂専門委員会と資料センターのスタッフの関係について、編纂専門委員会運営要領(案)の第2条三、ないし第5条4に依拠して資料センターのスタッフが編纂専門委員会にかかわることが出来る旨の補足説明があった。

各委員から、「早稲田大学百五十年史編纂専門委員会運営要領」(案)第2条二の委員は、編纂委員の中での互選と考えてよいか、という質問が出された。それに対して、委員長から、そのように想定していると回答があった。

2. 資料調査・収集の件

(1) 学術院関係等の資料について

委員長より、今後、教務部所管資料(教務課以外)、および学術院関係資料等を調査していくことになるが、学術院には保存文書目録がないとも考えられるため調査方法に工夫が必要である旨の説明があり、協議した。

また、各委員から以下のような意見が出された。漠然と学術院関係資料を請求するのではなく、どういう資料を調査したいか具体的に示して調査依頼を出す必要がある。それに対して、委員長からは、改革・改編や大きな事柄に関係する資料の調査を優先させる。本部資料では結論・概略しかわからないため、学術院側の資料によって明らかにすることを重視したい、といった回答があった。

(2) 研究推進部、研究院・研究機構の資料について

委員長より、研究推進部から二〇一四年三月末をもって廃止される研究機構の資料の扱いについて相談があったことを受け、今後、研究推進部および研究院・研究機構等の資料の調査・収集も行う必要がある旨の説明があり、協議した。

各委員から出された意見は次の通りである。

- ・ 研究機構が廃止される際に保管資料が処分される恐れがあるのみならず、研究機構の中にある個々のプロジェクト研究所の資料はそもそも研究機構の管轄外であること。
- ・ プロジェクト研究所の財務関係の資料については一〇年間保管しているが、その資料は研究推進部でも残しておき会計検査院の監査に備えているはずであること。

・ 研究機構の運営委員会の資料・議事録を収集・保管していく必要があること。

・ 研究機構の活動報告書なども収集する必要があること。研究推進部では、廃止される研究機構の資料を大学史料センターに移管することを決めているが、研究機構の方ではそうした意志決定はなされていないこと。

右のような意見を受けて、委員長が、まずは、どのような資料があるのか調べたうえで、基準を決めて保存していくことになる、と答えた。

3. 理事会・評議員会・維持員会資料目録化の件

委員長より、大隈会館地下の法人会議資料の目録化を継続すること、ならびにそれらをマイクロ化・デジタル化する準備をすすめることについて説明があり、協議した。

4. 学内資料の公開の件

委員長より、学内資料の受入・公開・保管の基準等について詰めておく必要がある旨の説明があり、協議した。

5. 学徒出陣及び戦争犠牲者に関する調査の件

委員長より、学徒出陣及び戦争犠牲者の調査について、資料センターでのこれまでの調査の経緯と今後の課題について説明があり、協議した。

各委員等から以下のような意見が出された。今後、調査結果をさまざまな形で公開していく必要がある。データベースとしてweb上に公開して検索できるようにする必要がある。慶應義塾大学では学徒出陣関係の資料調査・聞き取り調査を本格化しており、本学でも力を入れる必要がある。

なお、報告事項は、次の通りである。第一に、資料調査・収集状況の件である。担当者より、①本部保管文書目録の資料センターへの提供状況、②学内資料（総務部総務課の資料、広報室広報課の資料）の資料センターへの搬送・移管状況について説明があった。第二に、理事会・評議員会・維持員会資料目録化状況の件である。担当者より、理事会関係資料の本部への返却・再借出と目録化の現状について説明があった。

(二) 議題稟議と編纂専門委員会（第四回）

一二月三日に予定していた編纂委員会は、定足数を満たさず、未成立となった。そのため、この会議で協議を予定

していた「協議事項の1」（早稲田大学百五十年史編集・執筆体制に関する件）を中心に、年末に持ち回り稟議を行って、了承を受けることが出来た。すなわち、編纂専門委員会の機能・権限を明確化して、編纂委員会の下で具体的な編集作業にあたることが決まったのである。以前、新たに「編集委員会」を設けるといった方向に進んでいたが、より簡潔に、専門委員会の権限・機能を明確化することに変更したのである。

年が明けて、二月六日に専門委員会（第四回）が二号館の津田左右吉記念室（二二〇〇～二三〇〇）で開催された。出席者は四名であった。協議事項は次の三件である。

1. 編纂専門委員会における審議の見通しの件

委員長より、「編纂専門委員会運営要領」に基づき、①第一巻の執筆方針・構成・内容、②第一巻の原稿執筆担当者案、③第二巻・第三巻の執筆方針・構成・内容、④資料収集の本格化、などについての説明があり、協議した。

なお、今年度内（二月末～三月中旬）に編纂委員会（第二回）を開催して、上記の編纂専門委員会における審議の見通しについて承認を得ることが、編纂日程上、不可欠である旨の補足説明があった。こうした説明をうけて、各委員から、今年度内に定足数を確保して編纂委員会（第二回）を開くことは可能なのか、といった意見が出た。それに対して、委員長が各委員の都合をよく伺い、開催日時を決めたい旨の回答があった。

2. 戦争犠牲者調査具体化の件

担当者より、戦争犠牲者調査具体化について提案があり、協議した。戦争犠牲者情報（四七三五名、戦死者のみではなく広く戦災の犠牲者全般）については、これまで『早稲田大学百年史』や『早稲田大学史記要』で公開されてきた。しかし、これらのリストには含まれていない未公開の項目を含んだ「早稲田大学戦没者調査表」が百年

史編纂時に作成されている。今後、百五十年史編纂事業として「早稲田大学戦没者調査表」のデータベース化を進めるとともに、完成後の公開方法を決め、不明項目の再調査（個人情報、学歴情報、戦没情報）を行う必要がある旨の説明があった。なお、戦没情報の調査には厚生労働省や靖国神社の資料調査が不可欠である。さらに、委員長から、学徒出陣経験者に対するヒアリング調査について、大学史資料センターの業務として現在進めている旨の補足説明もなされた。

各委員から、大学として戦争犠牲者の名前等を公開することにどのような意味があるのか、説明しておく必要がある、という意見が出された。

それを受けて、担当者が次のように回答した。学徒出陣関係の調査の一環として戦争犠牲者調査が不可欠である。例えば、召集・出陣の経緯が明確でない場合がある。同じ年齢であっても誕生日の月日によって事情が異なるなど、生年月日も重要な情報である。また、遺族などが戦争犠牲者を調べる上でも、情報を公開しておく必要がある。

委員長が次のように補足した。レクイエムとして百年史段階で公開されたリストの誤りを正し、精度を高めるものである。調査結果を死蔵させることなく拡充し、データベース化しておけば、戦争犠牲者情報の確認がしやすくなる。また、大学として戦争に対する姿勢や社会的責任を果たす意味合いもあり、単なる学術調査ではない。公開や掲載する際は改めてその趣旨を明記したい。こうしたデータベースを公表している大学は他になく、重要な前例となるはずである。

各委員から、調査データと公開データの項目数が異なってもよいのではないか。調査は詳細に行い、どの程度公開するかは再度検討してはどうか、といった意見も出された。

3. 既存資料・文献のデジタル化と公開の件

担当者より、既存資料・文献（大学全体、大隈重信及び四尊関係刊行物、学部・付属学校など）のデジタル化と公開について提案があり、協議した。デジタル化といってもPDFかテキストデータかで費用が大きく異なるうえ、近代デジタルライブラリーで公開されている資料をデジタル化する必要があるか、また作業の優先順位をどうするか、など様々な問題がある旨の説明があった。

これを受けて、各委員から様々な意見が出された。例えば、『百年史』のWeb公開については、執筆者の著作権の有無についての問題が残されており法務課と相談して解決する必要があること、その他の書籍についても事前に著作権について確認しておく必要がある、といった意見が出された。

それに対して、委員長が『百年史』にかかわる著作権問題を解決したうえでどこからどのように始めるのかといった作業手順を決める必要がある、また、発行元が早稲田大学出版部となっているものがあるので大学出版部とも百五十年史編纂事業について打合せを行いたいと、回答した。

また、委員から、戦前の『早稲田学報』についてもデジタル化してもらいたいという意見が出された。担当者が『早稲田学報』については、大学図書館のリポジトリで公開してもらおう方法も考えられる、と回答した。

報告事項として、委員長より昨年末の議題稟議の結果について説明があった。さらに、懇談事項は次の二件であった。

1. 専門委員の補充の件

委員長より、審議の見直しに対応した専門委員（二号委員・三号委員）の補充について説明があった。各委員から、専門委員の交替はあるか、という質問が出た。委員長が、次のように回答した。専門委員の任期は二年で再

任を妨げないことになっている。「第2条三号 本学の教職員等のうちから編纂委員長が指名する者」とあるように、二号の編纂委員を辞めた場合でも、三号の委員として任命することができる。

2. 二〇一五年度以降の業務体制を念頭においた人員配置の件

委員長より、編纂委員会(稟議)の承認事項を踏まえて、業務体制を念頭においた人員配置について説明があった。委員から、囑託の場合五年が限度であるが研究員であれば一〇年まで雇用できるのであり、各巻の記述の一貫性を保つためには研究員としての雇用も検討してはどうか、といった意見が出された。

二 二〇一四年度前期の状況

(一) 二〇一四年度編纂委員会(第一回)の開催

四月九日に編纂委員会(第一回)が、大隈会館三階N三〇五会議室(二二・一五～二三・〇〇)において開催された。出席者一五名、欠席者四名であった。もともと、前年度の三月頃を予定していたが、出席確保が難しく、二〇一四年度にずれ込んだのである。まず、協議事項は次の通りである。

1. 早稲田大学百五十年史編集・執筆体制に関する件

(1) 編纂専門委員会における審議の見通し

大日方委員から、二〇一四年度以降の編纂専門委員会における審議の見通し(第一巻の概要と原稿執筆担当者案の作成、および編纂委員会へのその報告予定など)について提案があり、承認された。

(2) 編纂専門委員の補充

大日方委員から、現編纂専門委員三氏（浅古弘、沖清豪、真辺将之）を、編纂専門委員会運営要領第2条の二に基づき、編纂専門委員（任期二〇一四年四月九日～同年五月三十一日）として選出することが提案され、承認された。さらに、大日方委員から、編纂専門委員会運営要領第2条の二に基づき、川口浩、島善高の二氏を編纂専門委員（任期二〇一四年四月九日～同年五月三十一日）として補充することが提案され、承認された。今回は暫定的な移行措置であって、次回の二〇一四年度第二回編纂委員会（六月開催予定）において、改めて編纂専門委員選出の手続きをとる旨の説明があった。

(3) 二〇一五年度以降の業務体制を念頭にいた人員配置

大日方委員から、二〇一五年度以降の業務体制を念頭にいた大学史資料センターの人員配置（助教一名、助手一名、常勤嘱託一名、非常勤嘱託五名）とそれらの業務分担について提案され、承認された。上記の八名は資料センターの通常業務も担うことになる旨の補足説明があった。

2. 戦争犠牲者調査具体化に関する件

大日方委員から、戦争犠牲者のリストについて既に四七三五名分のデータベースを作成しているが、項目の追加入力によってデータを充実させるとともに、合わせてデータベースの校正作業を行う旨の説明があり、承認された。web公開に際して個人情報に配慮するとともに、データベースに未登録となっている戦争犠牲者について、新たに厚生労働省や靖国神社等の資料を調査する必要がある旨の説明があった。なお、戦争経験者からの聞き取り調査については、既に資料センターの業務として推進している旨の補足説明があった。

3. 既存資料・文献のデジタル化と公開に関する件

大日方委員から、『早稲田大学百年史』のデジタル化とweb公開を最優先し、その後優先度を考慮しながら既存資料・文献のデジタル化と公開の作業を進めることが説明され、承認された。それを受けて委員から次のような意見が出された。

まず、デジタル形式はPDFかテキストデータかという質問が出され、それに対して担当者から、PDFかテキストかについては、費用の問題もある。PDFであれば自前で作成することも出来るが、検索にはテキストデータの方が優れていること、最近では、スキャンしてから文字の訂正をするといった方法がとられている、と回答がなされた。

さらに、編纂業務における人名検索などには、テキストデータのほうが便利であり、是非、テキストデータにしてほしいといった意見が出された。それに対して、大日方委員から、デジタル化の方法とその公開については、早稲田大学図書館、早稲田大学出版部なども協議したい、と回答があった。

また、報告事項は、①早稲田大学百五十年史編纂委員会の議題稟議に関する件、②早稲田大学百五十年史編纂専門委員会の報告に関する件、③資料調査・収集状況に関する件、④理事会・評議員会・維持員会資料目録化状況に関する件、⑤データベースに関する件、の五件であった。殊に③では、学院関係資料等の調査・収集については、改革・新設にかかわる資料を重点的に調査・収集する旨の補足説明があった。

(二) 二〇一四年度の編纂専門委員会(第一回)

六月二四日(火)、大隈記念タワー(二六号館)三〇一会議室(二二:一〇〜一三:〇〇)において、編纂専門委員会(第

一回)が開催された。出席者五名、欠席者一名であった。議事に先立ち、委員長から、現在、編纂専門委員の任期(二〇一四年四月九日～同年五月三十一日)が切れているが、七月三日開催予定の編纂委員会(第二回)において、あらためて選出の手続きをとり、遡って承認を得る予定である旨の説明があった。先ず、協議事項は次の通りである。

1. 執筆方針・構成・内容の件

委員長より別紙に基づき説明があり、協議した。各委員から、本編は文章だけなのか、それとも写真を入れるのか、という質問が出された。それに対して委員長が、写真については、巻頭の口絵とする、あるいは本文の随所に入れるなどが考えられるが、今後協議していきたい、と回答した。

2. 第一巻の概要の件

委員長より別紙に基づき説明があり、協議した。各委員から、第一巻第3部では学生及び学生生活をどう扱うのか、『百年史』で書いたので書かないということか、一九二〇年代から三〇年代前半には学生生活が発展していたはずである、といった質問があった。委員長が、学生生活についても記述したい。書き方についてはまた別途検討したい。第3部については、聞き取り調査、戦争犠牲者調査などの成果についても書き加えていきたい、などと回答した。

さらに、各委員から、『早稲田学報』は非常に便利であるためデジタル化して、図書館のHP(リポジトリ)などで公開してもらいたい、といった意見が出た。それに対して、委員長が、予算の問題もあるので、図書館などと協議しながら、具体化にむけて検討していきたい、と回答した。

また、報告事項は、①資料調査・収集状況の件、②理事会・評議員会・維持員会資料目録化状況の件、③データベースの件、④戦争犠牲者及び戦争体験聞き取り調査の件、の四件であった。④に関しては、各委員から、『早

『稲田学』の授業で戦争体験者が話しているところを映像記録として残し、他の授業などに転用できるようにしてはどうか、といった意見が出た。委員長は、体験者の承諾を得ることが前提となるが、映像に残すように担当者と相談したい、と回答した。

(三)二〇一四年度編纂委員会(第二回)の開催

次いで、七月三日には、大隈会館三階N三〇五会議室(二二・一五〜一三・〇〇)において編纂委員会(第二回)が開催された。出席者一名で、欠席者八名であった。まず、議事に先立ち、会議運営につき、特別研究期間などで在外中の委員については、今後、編纂委員会の成立要件から除くことを申し合わせた。協議事項は次の三件であった。

1. 編纂専門委員選出に関する件

大日方委員から、編纂専門委員会運営要領第2条の二(編纂委員のうちから選出された者)に基づき、先の編纂委員会(第一回)において選出された浅古弘・沖清豪・川口浩・島善高・真辺将之の各委員を引き続き編纂専門委員(任期二〇一四年六月一日〜二〇一六年五月三十一日)として選出したい旨の提案があり、これを承認した。なお、任期については、遡って六月一日付とする旨の説明があり、承認された。

2. 『早稲田大学百五十年史』第一巻の概要に関する件

大日方委員から『百五十年史』第一巻の概要、および『百年史』と比較した場合の特徴などについて説明があり、今後、専門委員会において十分審議して、次回編纂委員会(一月末ないし二月上旬に開催予定)において第一巻のより詳細な構成について協議することとなった。なお、第一巻第3部の戦争に係ることについては、現在、大学史資料センターで進めている聞き取り調査の成果を反映させること、また、「関連出版物」については、学

生・校友に手軽に手に取ってもらえるコンパクトで分かりやすい書籍も計画していることなどの補足説明があった。

3. 既存資料・文献のデジタル化と公開に関する件

大日方委員から、既存資料・文献のうち、『早稲田大学百年史』のデジタル化を優先する旨の説明があり、承認された。また、『早稲田学報』をデジタル化する計画に関して説明があった。なお、『早稲田学報』については、図書館で既にマイクロフィルム化されている部分（一九〇六年まで）はそれを活用し、それ以降の分については図書館と協議していきたい旨の補足説明があった。

次に、報告事項は、①早稲田大学百五十年史編纂委員に関する件、②早稲田大学百五十年史編纂専門委員会の報告に関する件、③資料調査・収集状況に関する件、④理事会・評議員会・維持員会資料目録化状況に関する件、⑤データベースに関する件、⑥戦争犠牲者及び戦争体験聞き取り調査に関する件、の六件であった。

④については、各委員から、2社の参考見積書を比較してみると、解体・復元費用が両社で大きくことなっているが、その理由は何かという質問があった。それに対して担当者が、業者による方法の違い（修復専門業者に依頼するか否か）などによるものと答えた。さらに、大日方委員から、業者に撮影の仕方や解体・復元の仕方などについて確認し、今後、正式な見積書作成に向けて話し合っていきたい旨の説明があった。

⑥については、各委員から、聞き取り調査の対象者をどのように選んでいるのかという質問が出た。それに対して、大日方委員が、出陣学徒の会など様々な方面から情報を得たうえで、こちらから連絡を取り対象者を決めている。調査対象者から紹介を受ける場合もある。高齢なので機会を逸しないように急いで調査を進めている、と回答した。

さらに、各委員からの聞き取り調査の候補者は多いかという質問に対して、大日方委員がそれほど多くはなく、同一人物から何回かにわたって聞き取る場合もあると回答した。

なお、編纂委員会の終了後、大学史資料センターでは、次年度秋に開設される予定の百五十年史編纂室（仮称）の予定地を調査して、同室の間取りなどを検討した。

三 九月下旬の拡大編纂専門委員会の開催

大学史資料センター内の百五十年史WGにおいて、七月から九月にかけて『早稲田大学百五十年史』第一巻の構成について話し合いを重ね、次の編纂専門委員会に備えた。当初、九月の夏休み中に編纂専門委員会を開催することを計画していたが、編纂専門委員の都合をすり合わせた結果、夏休み明けすぐに開催することになった。

編纂専門委員会（第二回）が、九月二二日（月）に大隈会館N二〇四会議室（一三三三〇～一六三三〇）で開催された。編纂専門委員の六名全員が出席した。先ず、協議事項は、次の三件であった。

1. 編集・執筆の基本方針と体制の件

委員長から編集・執筆方針と全巻の構成について説明があり、協議した。各委員から出された意見は次の通りである。

〔外国語版〕委員から、『百五十年史』では英語版など外国語版が必要であるが、英語版作成には日本語版を翻訳するか英語版を独自に作成するか、の二通りあるという意見が出された。一方、他の委員からは、英語版の製作的ためには、人名の正確な読みを把握する必要がある旨の意見が加えられた。さらに、広報室などが写真を多

用して編集した和英対照の校史『WASEDA 125 1882-2007』（早稲田大学広報室・創立一二五周年記念出版委員会、二〇〇七年一〇月刊）も参考にすべきであったといった意見も出た。

〔『百五十年史』の構成〕各委員から、『百五十年史』の構成は、『百年史』とは大きく変えるべきではないか、という意見が出された。これについては、次の協議事項（『早稲田大学百五十年史』第一巻の構成の件）のところで、再び議論された。

〔『百年史』との関係〕各委員から、『百五十年史』第一巻は『百年史』（第一巻～第四巻）をコンパクトにしたものと考えてよいか、という質問があった。それに対して、委員長から、単に『百年史』を圧縮したコンパクト版では面白味に欠けるので工夫が必要であり、新しい研究成果や新資料、既存の資料の読み直しなどによって、『百年史』との差異化を図りたい旨の回答があった。

〔自校史教育〕各委員から、校史教育については教室による授業だけでなく、コースナビを利用して配信してどうか、編纂の過程で見つかった新しい成果をいち早く学生に伝える方法があってもいい。それに対して、委員長から、現在の早稲田ライフABCは入門編のため簡略なものになっているが、本格的な内容のものを載せていくことも考慮すべきである、との回答があった。

また、委員長から二〇一四年度の審議日程と二〇一五年度の編集体制についての説明もあった。

2. 『早稲田大学百五十年史』第一巻の構成の件

委員長より、別紙に基づき説明があり、協議した。各委員から多くの意見が出された。分類して示すと、以下のようなになる。

〔『百年史』の問題点〕担当者から、『百年史』第一巻・第二巻には情緒的な記述があることから、百五十年史

編纂の際には文体にも注意すべきであること、第一巻第一編のみならず、第二編の小野梓の記述もコンパクトにまとめることになるなどの説明があった。

委員長からは、カリキュラムや総長のあいさつ文、祝辞などは、別に資料集を作つてそれを参照してもらえば、『百五十年史』第一巻の頁数を圧縮できるといった補足説明があった。

〔学生生活〕各委員から、戦前の学生生活について、例えば、交通環境や昼食をしていた場所、アルバイト料といったことなどをまとめて記述すべきであるといった意見が出された。『百年史』では、こうした学生生活に關する記述が分散されて記載されていたが、まとめておくこと分かりやすくなるというのである。それに対して、委員長から、『百五十年史』の分量の制約もあるため、学生のサークル的な活動やスポーツ、卒業生の活動をどう盛り込んでいくか、といった問題がある旨の回答があった。

〔東京専門学校・旧制早稲田大学の授業など〕委員から、東京専門学校に英語政治科があるが、英語で授業がなされていたわけではないこと、戦前の朝の授業開始時刻の正確な記録が残っていないことなど、教育内容や制度について細部の調査が必要である旨の意見が出された。

〔キャンパスの変遷〕委員長より、キャンパスは最近大きく変化し、平面だけではなく、建物は高くなっていくので、それらの変遷をどのように書くのかという問題があることや、建物が変わると学生の流れも変わり、それらに連動して様々な変化が起きた筈である旨の補足説明があった。

〔大学史資料センターのレファレンス記録〕委員から、資料センターに寄せられた問い合わせの記録の有無についての質問が出た。担当者から、電話による問い合わせについてはすべてが記録されているわけではない旨の回答があった。それを受けて、委員長が『百年史』を調べても分からなかったことは何か、整理しておく必要が

ある旨の発言がなされた。

〔早稲田騒動〕各委員から、『百年史』では、高田早苗側の記述に偏った嫌いがあるが、『百五十年史』では天野為之側の言い分にも耳を傾けてみる必要がある、といった意見が出された。それに対して、委員長から、早稲田騒動についてはなかなか高いレベルからの記述がなされてこなかったことや、以前、資料センターで天野展を開催したが、新しい資料はあまりない、といった回答がなされた。

〔第一巻の編成〕各委員から、テーマ別の編成にするなど『百五十年史』第一巻の章立てを『百年史』と大きく変えてみる方法もあるが、全巻の統一性も考慮して、第一巻だけが他の巻と異なることがないようにしなければならぬ、といった意見が出された。一方、他の委員から、『百五十年史』の大きな構成については既に合意が出来ていたと思う。第一巻の編纂スケジュールや分量の関係から、『百年史』のコンパクト版と新研究の成果を中心にする以外にはない、といった意見が出された。

こうした議論を踏まえて、委員長から次のような説明があった。『百五十年史』だけで内容に筋が通っている必要がある。いちいち『百年史』を参照しなければストーリーが理解できないようでは、読者側にフラストレーションがたまってしまう恐れがある。第一巻の第一部・第二部・第三部の枠組みは原案のままにして、その中の小項目を大きく変えてみるといった方法を考えてみたい。さらに、国際的な動向を踏まえたダイナミックな校史を描きたい。

〔聞き取り調査〕各委員から、編纂専門委員会委員は何れも文系出身者であるため、理工学術院の状況を把握するための工夫が必要である旨の意見が出された。また、白井元総長にもヒアリングしてみる必要がある旨の意見も出された。

〔資料調査〕委員長から、学部の新設・改廃などに関する資料を重点的に収集する必要があるため、来年度から開始したい旨の説明があった。なお、委員長から、『百五十年史』の通史の中に学部側のことをどのように盛り込むかという難題がある旨の補足説明があった。

3. ウェブサイトの件

担当者より、『百五十年史』の電子書籍化の準備、『百五十年史』の公式サイトの開設計画などについて説明があり、協議した。なお、大学本部から、各箇所に対してHPの形式を統一すべきという指示が出されているため、『百五十年史』の公式サイト計画もそれらに影響されることになる。

〔文書の公開基準〕各委員から次のような意見が出された。ウェブ状況は時々刻々変化していくものであるため、将来のweb環境の予測は困難であって、今詰めておくべきことは公開の原則ということになる。早大の場合には公開基準が決められていない。京都大学、慶應義塾大学など他大学の事例もよく調査して参考にすることがある。それに対して、委員長から、戦争犠牲者名簿についても、どの範囲を公開すべきか検討が必要である、との説明があった。

〔『百五十年史』の電子書籍化〕担当者から、最初から電子書籍化することを出版社と契約しておく必要がある、そうでないと余分な費用がかかる旨の補足説明があった。また、各委員から、『百五十年史』をデジタル化すれば、年表、資料、地図などにリンクさせることが出来る旨の意見が出された。委員長からは、出版社は早稲田大学出版部が第一候補となるが、電子書籍化について出版部と協議したい旨の回答があった。

〔『百五十年史』公式サイト計画〕各委員から、このサイトには何を載せる予定なのか、編纂の進捗状況であれば、大学史資料センターのHPで済むのではないか、といった意見が出された。それに対して、委員長から次

のような回答がなされた。『百年史』の電子版、『百五十年史』の資料集、百五十年史編纂組織や編纂の進捗状況のニュースなどを掲載する予定である。まずは、大学史資料センターのHPで出来る範囲で、『百五十年史』関連の情報発信を開始し、今後、重いデータの公開の方法を探っていきたい旨の回答があった。

なお、報告事項は、①二〇一四年度百五十年史編纂専門委員会（第一回）の報告の件、②二〇一四年度百五十年史編纂委員会（第二回）の報告の件、③資料調査・収集状況の件、④理事会・評議員会・維持員会資料目録化状況の件、⑤戦争犠牲者及び戦争体験聞き取り調査の件、その他であった。

その他のところで、百五十年史編纂事務局より、来年度九月に、百五十年史編纂室（仮称）の開設を予定している旨の報告があった。④では、これまで決議録の目録化はしてこなかったが、法人課保管の資料の中に戦前のものを含めてかなり多くの決議録が残されていることが判明したことなどから、今後決議録も目録化することにした旨などの補足説明があった。

このように、九月の専門委員会では、活発な意見交換がなされたのであって、『百五十年史』の具体的な内容に踏み込んだ議論が始まったといった印象であった。三時に休憩を挟みながら五時間にわたる長い会議となった。一〇月一日、資料センター内での百五十年史WGにおいて、百五十年史公式サイトに掲載するデータについて具体的な構想が示された。今後の『百五十年史』関連の日程であるが、十一月一八日に今年度第三回目の編纂専門委員会を開催する予定であり、その結果を踏まえて年末（十二月二日）に編纂委員会（第三回）が開かれることになる。

おわりに―早稲田大学百五十年史編纂室（仮称）の開設準備―

以上、最近の一年間の編纂の進捗状況について述べてきた。いよいよ、二〇一五年四月には『百五十年史』の執筆が開始される。さらに、九月には、早稲田キャンパスのSTEP21の六階内に早稲田大学百五十年史編纂室（仮称）が開設される予定となっている。現在、編纂室開設に向けて大急ぎで準備をしているところである。配架図書・資料の選定作業もしなければならぬ。書庫のスペースは限られているため、資料センターが管理している2号館旧書庫も整理して、編纂室の書庫の不足を補う必要がある。

編纂室の側に会議室が出来ることになっている。そこで編纂専門委員会を開くことができるため、たいへん都合がよい。計画通りに開設されれば、百五十年史編纂室は『百五十年史』が完結するまで本部キャンパスの一角を占めるはずである。百五十年史編纂の拠点であるばかりではなく、資料センターによる早稲田学（自校史教育）の準備室となり、企画展のための作業室ともなる。多機能にして機動的な施設として威力を発揮することであろう。